

「お疲れ様でした」

店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は黄色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから俺は、視界いっぱいに広がる街を眺めた。

なんとということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。

魔術王による人類焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

「……………」

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

「……………」

胸の内を、万感の思いが満たす。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えていいる。

そこで得た出会いや別れも、何一つ忘れることなく鮮明に記憶している。

——我が親愛なる、強く尊き聖女のこととも。

「……帰るか」

俺もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。

大橋を渡った先にそのアパートは存在する。

「……地震怖えなあ」

十人中十人がオンボロと言うであろうその外観に苦笑が漏れる。

ぼろ臭さが逆に懐かしいと言ってこのアパートへの居住を決めた相方は、住めば都ということに慣れ始めているようだけど、個人的にはもう少し綺麗な所に引越したい所存だ。

なにせ大事な、きつと世界で一番大切な人を住まわせるのだから。

……まあ、今のところ主に予算の都合で引越しの予定はないんだが。

甲斐性なしな自分に半ば呆れながら錆びついた階段を上る。

二階の端。

日当たりだけはいい角部屋の、これまた古臭いチャイムを押すと、ドアの向こうから。パタ。パタと足音が――

「ん？」

聞こえてこない。

不思議に思いながら自前の鍵で扉を開けると、中には誰もいなかった。

「こんな時間に何してんだ……？」

いつもなら部屋で腹を空かせている頃だと言うのに、ボロアパートに同居人の姿

は見当たらない。

俺は首を傾げながらも、再び外へと出た。

そして、十分後。

「や、やめなさい、こらっ！　あまりおいたばかりしては……や、やめてください！　取れません！　それは取れませんから！」

いた。

公園にいた。

公園で子供に絡まれていた。

「あ、マスター！　ちようどいいところに来てくださいました！　どうか救援を！」
俺の姿を見るなりばあ、と表情を明るくし俺に向かって言葉を吐いているがアレは誰だろう。

俺は知らない。

あんな、子供数人に涙目にされる少女を俺は知らない。

俺が知っているのは世界的に有名な聖女、ジャンヌ・ダルクであり断じて子供に虐げられるか弱い乙女ではない。

……いや乙女なところもそりゃあるけど。なんであの人サーヴァントなのに子供に涙目にされてんの。か弱さの方向がおかしいでしょちよつと。

「マスター!?! 何故私に背を向けるのですか! 私です! ジャンヌ・ダルクです! あなたのサーヴァント、ジャンヌ・ダルクです!」

子供たちの魔の手から逃れるため必死に真名を口にするジャンヌ。声色からして必死だ。何をあんなに追い詰められているのだろう。ワイバーンを前にした時はあんなに勇ましかったというのに。

……仕方ない。助けに行くとしよう。

彼女のたった一人のマスターとして。

俺は一つ苦笑してから、彼女の救出へと向かった。

世界を救い、その後処理を全て済ませた後、俺はカルデアには残らず日常に戻る

という選択をした。

元々、魔術の腕はからつきしだったから、カルデアの研究者として残るといふのは少し無理のある話だった。

ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後には快く送り出してくれた。

『どうか元気で。君に最上の幸福があることを祈るよ』

涙ながらに俺の手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えてい
る。

そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、俺はカルデアを出たんだが…
…。

子供たちを見送ったのち、聖女ジャンヌは俺に微笑みかけた。

「助かりました……救援感謝します、マスター」

「おう……で、なんで襲われてたのお前。大人げなく砂場荒らしたりしたの？」

「そ、そんなことしません！ 私のコレが、彼らは気になつたらしく……」

言いながら、彼女は自分の頭についている兜のような物を指差した。

「まあ確かに、普通の方には付いていない物なので気になるのは当然なのですが、まさか引き剥がしに来るとは……」

「子供はすぐ実力行使に移るから……。で、あんな情けないことになつてたのか」「はい……振り払うこともできなくなつたのですが、それでは怪我をしてみようので……」

「その気遣いはさすが聖女サマって感じだな」

「と、当然の事をしたままでです」

「まあ俺が来てなかつたら今も群がられてたかもしれねえけど」

「うう……」

しよぼくれる聖女。勇ましきの欠片もない。

まあ、いいことではある。それだけ彼女が、この生活に気を許しているという事だから。

「……まあ、なんだ。子供も悪気があつたわけじゃねえだろうしな。許してやつて

くれ」

俺がそう言うのと、ジャンヌはこくりと頷いて見せた。

「はい。そもそも恨んではいません。子は元気が一番です」

「そうか。じゃあ今度子供たちに『あの姉ちゃんの兜取った奴が一等賞な』って伝えとくから」

「やめてください!」

「冗談だよ。……つうかそれ、消せるんじゃないのかよ。鎧や旗と同じで」

指摘と同時に、ジャンヌは無言で兜らしいそれを霧散させた。

「……何。忘れてたの」

「はい……」

「そもそもどうして兜出たの。今朝家出た時はなかったでしょアレ」

「浮かれていたら、勝手に……」

「ええ……」

でも確かに、マシユもホラー映画見てる時にびくりと震えた直後に思わず鎧と盾

を出現させていたりしたし、割とふわつとしてるのかもしれない。

「そもそも何に浮かれてたんだ……歩いてたらカレーの匂いでもしたのか？」

半ばげんなりとしながら問うた俺に、ジャンヌはやや頬を赤く染めながら俯いて、

「……貴方との、日常に」

そう、ぽつりとつぶやいた。

「……そんな浮かれるほどのものか？」

「貴方は違うのですか？」

「……違わねえけど」

ぼそりと告げた俺に、ジャンヌは淡くはにかみ、そつとこちらの指に自らの指を絡めてきた。

「つうかなんでこんな時間に外出てんだ？ 腹減りすぎて買い食いにも来たのか？」

「そ、そんな食いしん坊のように言わないでください！ ……実は、貴方を出迎えようとしたのです。帰りのルートを聞いておかなかったのが敗因です」

「子供トラップにも引つかかったしな」

「恥ずかしい……」

「……明日は、うちの店の前で待っていてくれ」

「え？」

「そこならルートも何もないだろ」

「は、はい！ 明日こそ、ちゃんと出迎えさせていただきますね」

言つて、ジャンヌは俺の手をきゅつと握り、

「おかえりなさい、マスター。今日もお疲れ様です」

そう、天使のような微笑みを浮かべたのだった。

『マスター！』

カルデアを出た俺を、聖女ジャンヌ・ダルクは慌てて追いかけてきた。

『ど、どうしたジャンヌ？ なんか忘れ物でもしたか俺？』

『い、いえ、そうではなく……私も、貴方の旅に同行します』

『は？』

突然の宣言に呆けた声を漏らした俺の眼前、ジャンヌは胸の前で手を組みながら、『いついかなる時も、貴方と共に。私はそう誓いましたね？ それは、人理を救った今も変わらぬ私の想いです』

『いや、そうはいつでも……』

『遠慮はいりません。苦難も悲嘆も貴方と一緒に乗り越えられます。さあ、私と共に行きましょう、マスター』

『ええ……』

『……待ってください。何か温度差を感じるのですが』

『いや、なんか押し売りじみてるなって……』

『誰が押し売りですか！ 貴方と共に闘った仲間がこれからも共に歩もうと誘っているのですよ!?!』

『いや、でもジャンヌ又食費で家計圧迫しそうだし……』

『しません！……少しはするかもしれませんが』

『すみません結構です』

『しません！ 断食します！ おやつも抜きにしますから！』

『いやいいよカルデアに住みなさいよおやつもご飯も出るんだしさあ』

『で、ですが……私は、貴方と共に行きたいのです……他でもない、貴方と共に……』

うう、としよんぼりしながら告げる彼女に、俺は溜息を吐いた。

『……分かった。行こう、ジャンヌ』

『ほ、本当ですか!?!』

『おう。でもアレだぞ、家事はしてもらおうし、そんないい生活はできねえぞ多分』
『はい! どうぞこき使ってください!』

一転して表情を明るくしたジャンヌに内心ほっと胸を撫で下ろしながら、

『しかし、随分と必死だったな』

『そ、そうでしょうか?』

『おう。まるで惚れた男に必死に縋るみたいだった』

『それは……』

『……ありがとな。そこまでマスターの俺に尽くしてくれて。主として心から嬉しく『あ、いえ、マスター……』何だ?』

『その……解釈としては、マスターが前に言った方で、正しいかと……』

『は？』

『……………』

呆けた声を漏らした俺の眼前、ジャンヌは頬を赤らめながら上目遣いで俺を見つめていて。

俺はその表情、視線、言葉から、また別の事柄について考えなければならぬことを思い知った。

あれから、一ヶ月。

俺と彼女は穏やかな同棲生活を送っていた。

「ジャンヌさんそれ何杯目？」

「……………3」「5だよな」はい……………」

「そんなにか。そんなに日本食気に入ったか」

「はい……………白米がとて美味しいです……………」

「そうか……遠慮せずたらふく食べよ」

「あ、ありがとうございますマスター」

「そんで思い切り太れ。子供たちに脇腹をつままれてしまえ」

「マスター!？」

……穏やかな同棲生活を送っていた。

「しかしよく食うな……どこに入ってたんだその細い体に」

「ど、どうでしょうか……」

「胸に栄養全部行ってる気がする」

「そ、それはセクハラというものですよマスター!」

「うるせえ飯食わせてやってんだからそのくらい言わせろというか採ませろ」

「……ど、どうぞ」

「いや冗談だよマジにすんなよ……」

「ですが、その……マスターも殿方ですし、色々あるかと」

「ねえよんなもん……」

「時折胸の辺りをチラチラと見ているようですし……」

「……すみません」

「い、いえ……貴方になら、別に……」

「エロ聖女」

「すみません今度し難い言葉が聞こえたのですが」

「男に胸揉ませようとする聖女をエロ聖女って呼んで何が悪いんですかあー？」

「も、元はと言えば貴方が言ったのではありませんか！」

「サーヴァントとしての衣装もどんどんエロくなつてたし」

「アレは私のせいではありません！　そもそもエロくありません！」

「フツ」

「鼻で笑いました!?　今鼻で笑いましたか!？」

「あんな肩ポーン太ももバーン胸ドーンの衣装で聖女とか言われてもマスター困ります」

「ぐっ……い、いえ！　心が清らかであればあのような格好の私を見ても劣情は催さないはずですよ！」

「ふーん」

「信じていませんね？ まったく信じていませんね？」

「いやお前がそう言うならそれでいいけど。エロく見られたくはないわけだ」

「当然です！ アレは鬨いに出向く時の神聖な衣装なのですから！」

「そっかそっか。……じゃあこれからは極力そうするわ」

「はい。……？ そうする、とは？」

「え？ いや、ジャンヌの事エロい目で見ないようにするって事。まあそりゃそうだよな。そんな目で見られて喜ぶ奴もいないしな。ごめん今まで。これからは心を清らかにしてお前と接するわ」

「え、いえ、あの……」

「あー今だいぶ清らかになってきてる……今なら風呂上がりのジャンヌを見てもムラツとしないで済みそう……」

「ま、マスター……その、それはそれで、困るのですが……」

「心が清らかなので聞こえません」

「玩具にしていますね!? 今私を玩具にしていますね!?」

「いやそんな、心が清らかな俺がジャンヌを玩具になんてそんなそんな」

「しているではありませんか！ どうせ私の口から『エロい目で見てください』などと言わせるつもりだったのでしょうか!？」

「いやあそんなアツハツハ」

「アツハツハではありません！ もう、本当に貴方という人は……」

「……実際、見ていいのかよ、そういう風に」

「……見ていただかないと、いつか私が子を産めるようになった時困ります」

「……じゃあ今はまだいいか」

「……お任せします」

「冗談だよ、だからそんなぶすつとすんなよ。……エロい目で見ないなんて無理に決まってるんだろ」

「え?」

「安心しろジャンヌ。お前はエロい。俺が保証する」

「最低な保証がされましたね今……」

「だからまあ、その……風呂上がりとか、不用意に近づかないでいただけると助かります……」

「……こんな風にですか？」

「バツ……ジャンヌ……」

「ハグは親愛の証です。どうぞ受け入れてください、マスター」

「……仕方ねえ聖女サマだな」

「ふふっ」

参ったとばかりに苦笑すると、ジャンヌは俺の胸の中で嬉しそうに微笑んだ。

食事の後は二人順番に入浴し、しばらくテレビのバラエティー番組を視聴し、就寝の時間となった。

「なあジャンヌさんや」

「はい」

「外国には『男女七歳にして席を同じうせず』という言葉があつてな」

「はい」

「七歳ともなれば男と女の性は違うものであるという意識を持たせて同じ場所に

座らせたりしてはいけないと偉い人が言ったそうだ」

「それは大切な事ですね」

「俺今年で十九なわけだけど」

「おめでとうございます。成人まであと少しですな」

「いやそういう話じゃなくて……まあもういいか、眠いし」

「お疲れ様です。マッサージをした方がよかったですでしょうか？」

「いや、いいよ……どうせ誰かさんに腕を枕にされて凝るし」

「私のために貴重な腕をありがとうございます、マスター。仲間のために自ら負担を請け負う敬虔なマスターには感謝の意を抱かずにはいられません」

「やだ、この人さも俺が自発的に腕枕してるように言いやがった……」

「初日はそうだったではありませんか。『枕が無いなら寝づらいたろうから』って」

「いや次の日枕買ったじゃん。あるじゃんそこに。低反発のお高い枕があるじゃん」

「ご安心くださいマスター。貴方の二の腕も負けていません」

「性能の話はしてないんだよなあ……」

「……どうかお許してください、マスター。こうして眠ると、とても安心できるので

す。まるで貴方に、全身が包まれているようで」

「……聖女サマの安心に貢献できて光栄ですよ、っと」

げんなりとしながら言った俺に、ジャンヌはくすりと笑い、同じ布団の中で身を寄せてきた。

そして俺の胸元にすり、と頬を寄せてくる。

「猫かよ」

「猫です」

「でけえ猫だな……」

「どうぞ可愛がってください」

「可愛がれつつつてもな……下顎でも撫でるか」

「んっ……」

「おやすみエロ聖女」

「待ってください！ 今のは！ 今のはなかったことに！」

「いやもう寝ようぜ……なかったことにしてやるから……」

「……ではせめて抱き寄せてください。ぎゅっと、私を安心させるように」

「いつからそんな甘えん坊になっちゃったの聖女サマ」

「貴方が甘やかすからですよ」

「……それもそうか」

うん、と一人頷き、そっと彼女の身体を抱き寄せる。

「あつっ……やっぱやめようこれ。寝苦しい」

「耐えてください」

「俺の快眠……」

「子守唄を歌ってあげますから」

「……じゃあいいか」

「……本当に甘いですね、貴方は」

「お前が甘え上手なだけだよ」

彼女が誰かに甘えられるようになるなんて思ってもいなかったから。

彼女のお願いを、つい何でも聞いてしまう。

「……ジャンヌ」

「はい。何でしょう、マスター」

「……今日、幸せだったか？」

問いかけた俺に、彼女は確かに頷いて。

「……はい、マスター。とっても幸福でした」

「……そうか」

それは何より、と一人頷いて。

「おやすみ、ジャンヌ。明日もよろしくな」

「はい、おやすみなさい、マスター。どうか良い夢を」

二人、挨拶を交わし、目を閉じた。

これは、そんな物語。

聖女と過ごす、穏やかな日々の記録。

「ね、寝ましたか、マスター？」

「……………」

「寝ていますね……では、おやすみの、き、キスを……」

「……エロ聖女」

「ひっ……違うんです、これは……」

「……別に、普通にすればいいだろそのぐらい」

「え？」

「しないのか？」

「……し、します！」

「ん。……俺からでいいのか？」

「は、はい……」

「分かった。じゃあ、目閉じろ」

「わ、分かりました……ん……」

「……これでいいか？」

「は、はい、ありがとうございます……あの、マスター」

「なんだ？」

「これは、その……眠れなくなりですね。胸が高鳴ってしまっ……」

「……………」

「あ、あの、マスター？　抱きしめられると、余計に眠れなくなってしまうのです
が……………あう……………」